

偽善の奨め

しかし、このやうな例が極めて稀であることは、第一の場合と全く同様でせう。やはり「蛙の子は蛙」で、子は親に似るのが自然です。だから、私はかねてから「親は子供の目の前では、出来る限り立派なお手本を見せるやう努力すべきである」と世の親たちに訴へて来ました。私はこれを名づけて「偽善の奨め」と言ひます。

かう言ふと「偽善とは善くないことではないか」と反問されるでせう。しかし、私は「偽善こそ人間にふさはしい行為である」と考へてゐます。なぜなら、大聖孔子は「70にして心の欲する所に従へども矩をこえず」とおっしゃってゐます。大聖人でも、その晩年にやっと自然にふるまっても逸脱することの無い境地に到達し得たのです。我々如き凡人が、どうして努力しないで善が行ひ得ませう。

この「努力して行ふ善」が“偽善”なのです。“偽”とは“人為”といふ2字を1字につづめた字であつて、それは“自然”に対する概念を表したものです。「小人閑居すれば不善をなし、至らざる所無し」と言はれてゐますやうに、人間は心の趣くままにしてゐたら、とんでもない事をしかねないものです。だから、私たちは事あるごとにわが身を反省し努力して、善を為すやうに心掛けなければならないのです。このやうに努力して行ふ善は「人為の善」ですから、私はこれを“偽善”と言ふのです。

“偽”が“自然”に対する概念であるやうに、“文化”といふ言葉も“自然”に対する概念であります。“文化”といふ言葉は“カルチャー”の翻訳語であつて、それは本来は“耕作”を意味する言葉です。ありのままなる“自然”の中から穀物を収穫するのに対して、汗を流して“耕作”し穀物を収穫する。これが“カルチャー”であり、“文化”の本義です。つまり、“文化”とは“人為”の所産に外ならないのです。とすれば、「偽善を行ふ人こそ真の文化人」と言ふことが出来ませう。

私が敢えてこのやうなことを論ずるわけは、今の親たちの多くが「努力して良い手本を子供に示す」態度をもたないからです。「ありのままの親の姿を子供に見せること」が「潔いこと」であり、「自分を良く見せようとする“偽善”は卑劣である」と思ひ違ひをしてゐるやうに思はれるからです。

私自身について言へば、子供たちに良い手本を見せるべくかなりの努力をしたつもりではあつても、これを私の記憶にある亡き両親と比較してみる時、遥かに努力が足りなかったことを思ひ知らされて、子供たちに済まなかったといふ思ひに駆られます。

思へば昔の親たちは皆偉かったのです。それは、生活が大変だったから常に真剣に努力せざるを得なかった所為かも知れません。朝暗いうちから起き、夜晩くまで真剣に働く親の姿は、子供にとってこの上無い良い手本でした。